

J.S.バッハの BWV599～644 は《オルガン小曲集》としてまとめられている。これは 164 のコラール（賛美歌）を編曲する目的でヴァイマル時代に着手され、ライプツィヒ時代に至るまで 30 年余にわたって書き継がれたものだが、実際に作曲されたのは 45 曲。「かくも喜びに満てるこの日」は、クリスマス用のコラールで、揺らぐアルトの動きが揺りかごをイメージしている。「古き年は過ぎ去り」は新年のコラール。新しい光を歓呼で迎える。「主イエス・キリスト、われ汝を呼ぶ」は聖変化のコラール。曲集唯一、三声部となっている。「おお主なる神よ、われを憐みたまえ」はバッハの若い頃の作品と言われているオルガン編曲集《27 のコラール》所収。一風変わった曲で、モダンな響きさえ感じてしまう。「主イエス・キリストよ、われら汝に感謝す」は、再び前述の《オルガン小曲集》所収。受難節のコラールだが、明るい曲調。「すべての人は死ななければならない」は《オルガン小曲集》の最後から 2 番目。慰めのコラールで、同名のコラールがバッハの 4 声コラール集にも見られる。

ヘンデルの《ハープシコード組曲》は 2 集あり、その第 1 集は 1720 年にロンドンで出版された。ハープシコード独奏のための組曲集であり、8 組曲から構成され、『8 つの大組曲集』とも呼ばれる。なかでも第 5 番はよく知られており、演奏機会も多い。4 曲からなり、前奏曲に続いてアルマンド、クーラントといった舞曲が並ぶが、全曲中一番長い最後の「エアと 5 変奏」はのちに「調子の良い鍛冶屋」という通称が付けられ、誰しも聴いたことのあるメロディとなった。「パッサカリア」は、同じく《ハープシコード組曲 第 1 集》の第 7 番（全 6 曲）の最終曲。この曲も非常に有名で、単独の演奏機会も多い。ノルウェーの作曲家ヨハン・ハルヴォルセンがヴァイオリンとヴィオラのための二重奏に編曲したことでも知られている。

エリザベス朝に活躍した作曲家ジョン・ブルによる「地の偉大なる創造主」は、もとはローマ教皇グレゴリウス 1 世による聖歌で、火曜の晩課に用いられたもの。『創世記』における天地創造の 3 日目、海と陸が分けられる場面にあたる。

エリザベト・ジャケ・ド・ラ・ゲールはフランス・バロック時代の作曲家。クラヴサン奏者としても神童の誉れ高く、ルイ 14 世の寵愛を受けた。当時、女性作曲家は珍しく、全 2 巻からなる《クラヴサン曲集》は、フランスで出版された初期のチェンバロ作品としても貴重なものである。1687 年に出版された第 1 巻には 4 つの組曲が収められており、今回はその第 1 組曲から、荘重な前奏曲と、標題通りに様々な表情を見せるシャコンヌ「移り気な女」をお届けする。

ルイ 14 世に仕えたフランス・バロック時代の巨星フランソワ・クープランの作曲した《クラヴサン曲集》（全 27 組曲）は 1713～30 年までに 4 巻に分けて出版された。第 2 巻は 1716～17 年にパリで出版、7 つの組曲（オールドル）に全 51 曲が収められ、各曲にはエス

プリのきいた標題が付けられている。その**第6組曲・第5曲「神秘的なバリケード」**は、3つのクプレ（挿入部分）が絡むロンド。装飾も少なく平穏な曲。**第11組曲・第3曲「生まれながらのあでやかさ」**は、単純素朴なメロディ。**第1巻**は1713年にパリで出版、5つの組曲で全72曲所収。その**第4組曲・第4曲「目覚まし時計」**は、可愛らしい楽想と目覚ましのベルを想わせる楽想とが交互に現れるロンド。また第2巻に戻り、その**第8組曲・第8曲「パッサカリア」**は、半音階の進行を含んで上行するパッサカリアの主題に8つのクプレが入るロンド。

ジャック・シャンピオン・ド・シャンボニエールは、初期フランス・バロック音楽の作曲家である。クラヴサン奏者としても偉大で、クープランやラモーなどにつながるフランスのクラヴサン楽派の創始者とも目されている。シャンボニエールの作品はいくつかの写本にも見られ、なかでも17世紀フランスの**アンドレ・ボーアン・ド・ベルサン**が所有していた《**ボーアン写本**》は重要。これは3巻からなり、その**第1巻**にはシャンボニエールの作品が多数収録されている。シャコンヌは3拍子の古い舞曲で、バロック時代には変奏曲として流行した。

J.S.バッハの作品BWV972～BWV987は、ヴィヴァルディなど様々な作曲家の協奏曲をバッハがクラヴィーア独奏用に編曲したもの。若きバッハのヴァイマル時代に作られ、のちの《**イタリア協奏曲**》につながる作品群である。「**協奏曲 ト長調**」は、ヴィヴァルディの「**ヴァイオリン協奏曲 変口長調 RV381**」にもとづくもので、緩急緩の全3楽章からなり、きらびやかなイタリアの風を感じさせる曲調。「**半音階的幻想曲とフーガ**」は、作曲年代は定かでないが、おそらくケーテン時代の1719年頃に作られたものとされる。バッハのクラヴィーア作品のなかでも人気がある曲で、演奏機会も多い。「**幻想曲**」と「**フーガ**」の2つの部分からなり、「**レチタティーヴォ**」と記された「**幻想曲**」の後半ではめまぐるしく転調する。「**フーガ**」は半音階的な書法による三声のフーガとなっている。